

静岡県指定無形民俗文化財

法多山田遊祭 七段



1993

袋井市教育委員会

●空から見た法多山



法多山の地形的環境と塔頭

奈良時代に開山されたと伝える法多山尊永寺は、小笠山に源を發し西流する法多沢川によって開析された谷のもっとも奥に位置しており、尊永寺付近の尾根の裾部は、細かく開析された尾根と支谷が入り組んで複雑な地形を呈している。尊永寺の所在する谷と付近の丘陵はいわゆる小笠山礫層と呼ばれる地層で、境内付近の崖に堆積状態が確認できる。この礫層は部分的に砂層、泥層が確認され、泥層からは植物、貝類の化石を産出することで古くから知られている。

仁王門と本堂の標高は55メートルと75メートルでかなり差があり、境内はなだらかな上り坂になっている。この境内には明治9年(1876)までは四坊八院があり、一乗院、学頭坊、法藏院、無動院、法幢坊、円藏坊、自性院、大正院、察藏院、法生坊、西前院、悉地院の塔頭の名が、法多山の文献で確認されている。これにより、かつての法多山一山の規模を推し量ることができる。なお塔頭は享和3年(1803)の『遠江古蹟図絵』とは多少異なる。

法多山尊永寺の略縁起(「法多山縁起」より)

法多山はその山号にして、寺号を尊永寺と称し、本尊に聖観世音菩薩を奉安す。その昔、人皇45代聖武天皇の靈夢に東方より飛來の大悲観音を感得し、摩訶不思議なる靈告ありて聖武天皇災厄をまぬがれ給う。皇帝仍って、これより深く観世音菩薩の信仰あり、菩薩の大慈大悲により国難と一切庶民の災厄を除かせ給わんとすの御聖旨によって時の高僧行基上人に勅を下し、靈夢出現の観音を尋ねて東国遍歴の砌り、当山に登り給えるに不思議や樹下に独りの修禪化人ありて曰く、「汝の尋ぬる観音靈地はまさしくこの山なり、吾れ汝の來山待つこと久し」と告げて何処ともなく去り給う。

上人随喜してこの地に草庵を結び、白檀の香木を以て尊像を彫まんとするに先の化人十八の神童を伴ひ來りて草庵を守護結界す。上人是れぞ仏天の加護なりと随喜讚嘆して一刀三礼1尺4寸の聖観世音菩薩の尊像を彫み給う。その尊像たるや尊容まことに端嚴美麗にして、慈眼あふるるが如く金光明を放ち給うて、香薫紫雲庵中に満つ、この時さきの化人は十八神童を伴い忽然として去り給えり。

上人聖旨に添い奉る御本願の庶民災厄消除も麗像聖観世音菩薩を安置するを得たり。これ開創の縁起にして、後世俗に厄除観音として崇敬信仰的となり給うところなり。

法多山田遊祭 七段

〈修正会〉 法多山田遊祭は、法多山尊永寺の修正会(寺の正月行事)の一部で、「田遊」の舞は村方が担当して行われてきた。当日は、寺方(僧侶方)と村方(保存会)が同時に行事を進行させ7日の修正会を執り行う。なお、田遊は年の初めに米作りの一連の作業を模倣的に演じて豊作を祈願する予祝の神事で、民間に広く伝わっている。法多山の田遊には7段の舞が伝わり、まず太刀の舞と棒の舞で大師堂を清めた後、模倣耕作を行う。7段の舞の後大弓放ちと餅投げが行われる。なおかつては、浅羽の芝一門の人が隣席したというが、今日ではすべての行事が法多の人々だけで行われている。

〈準備〉 本格的な準備は6日の午後から始まる。村方は公会堂で田遊祭に使う道具を、寺方はゴオウサン(牛王宝印)を作る。牛王宝印は住職が版木で刷り、村方が用意したカシの木に挟み、小さく切った伸餅を置いて本尊に供える。

〈六日堂〉 6日の夕方になると村方は、太刀・棒・太鼓・白楯・師匠が行列して登山(寺に登る)し、本坊前で待ち受ける寺方の住職および提灯持ちと合流して大師堂に向かう。本堂前まで来ると寺方は本堂に、村方は大師堂に入る。本堂ではただちに牛王加持に移り、大師堂では御神酒(清めの酒)のあと太刀の舞と棒の舞を奉納する。これを「六日堂」という。

〈田遊祭〉 7日の当日は村方は朝から公会堂で準備をする。準備が終わると一旦帰宅して衣装を付けて集合し、オシキメシ(玄米)とオミキ(御神酒)をいただいで行列を組んで登山する。そして、本坊前で待ち構える寺方と合流して大師堂に向かう。平成5年の村方の行列は、先従士(2)―「五穀成就田遊祭」の旗(2)―花笠(1)―太刀(1)―棒(1)―大弓(6)―太鼓(5)―かっこう(1)―田打(2)―嫁(1)―のっとう(2)―鳥追(5)―保存会長(1)―総代(3)―師匠(2)―破魔矢(35)―ほか(5)で、寺方の先払金棒(2)―吹流(1)―幢旗(2)―獅子頭(1)―先従士(2)―大太鼓(3)―弓持(1)―金紋先箱(2)―行事(1)―法螺(1)―印金(2)―同躰(2)―妙鉢(2)―華籠持(不定数、印金から華籠持までを職衆と呼ぶ)―太刀持(1)―玉幡(2)―導師(1)―従弟子(本来は4だが2、大笠差掛・説相箱と座具)―草履取(1)―立傘(1)―駕籠(2)―金紋後箱(2)―長刀(1)―鎗(1)の行列の後につく。寺方は登山道中散華をしながら「法螺三吹・金一打・銅鑼四打・鉢一打」を繰り返す。

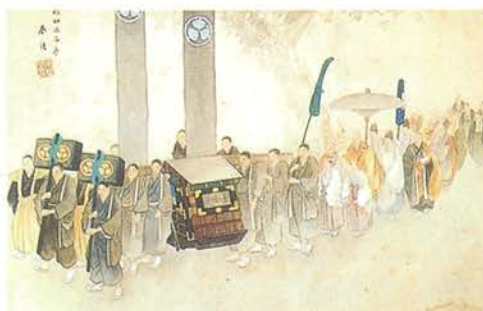
本堂前に到着すると寺方は2列に並び「庭讃」に移り、村方はそのまま大師堂に入り田遊祭を始める。寺方は「庭讃」が終わると本堂に入り「理趣三昧」を始める。



▲ 寺方で牛王宝印を作る



▲ 六日堂の登山



▲ 絵巻（昭和11年—1936—）寺方の行列



▲ 同上 村方の行列



▲ 太刀の舞



▲ 棒の舞

法多山田遊祭次第

御神酒

大師堂に到着すると袴姿の総代5人と、黒紋付に羽織袴姿の白緞の5人が、堂の後方に一列に並んですわる。太鼓は向かって右に、師匠は向かって左に位置する。まず「御神酒」といって、「そうとめ」の東の頭が注いだ酒を並んだ全員が飲み干す盃事から始まる。

第1段 太刀の舞

舞い手（黒紋付、裁着、鉢巻、右肩襷の衣装の一人舞）は総代の差し出す抜き身の太刀を片膝をついた姿勢で受け取る。左手で太刀の柄を、右手で刃の中央を支えながら左肩に載せる。そして右手には日の丸の開扇を持つ。

大太鼓が鳴ると同時に左足を前に東北に向かって大股に一飛びし、飛びながら扇を後ろに落とす。次に東北に向かったままの姿勢で、右手で太刀の刃の中央を持ち、うやうやしく太刀を持ち上げて頭上を越えさせ、右肩に載せて西南に向く。太刀の柄を右手で持ち左手は腰に置く。右足を前にして後ろ足を蹴るようにして一飛びし、腰にあった左手で刃を持つ。柄を持つ右手を上にして、地面をえぐるような姿勢で1回転する。再び東北に飛び、向きをかえて西南に飛ぶ。これをもう一度繰り返す。次は東南、西北と同じ所作を3回繰り返す。最後に南北（中央）にこの所作を繰り返して舞は終了する。この舞は、東西南北を四隅に取った五方の舞である。

第2段 棒の舞

太刀の舞同様に舞い手（黒紋付、裁着、鉢巻、右肩襷の衣装の一人舞）は総代から棒を受け取り、東北、西南、東南、西北、南北（中央）に向かって舞う。やはり五方に舞う。

太刀の舞と異なる所作は、棒を右手で掴んで上に投げ上げ、手の甲を上にして右手で受取り肩に載せる所作。また、両手で風車のように回転させながら進退する所作である。



▲ 白鍬…柳の小枝を拝む



▲ 絵巻 (昭和11年) 白鍬



▲ 牛ほめ…田を打つ所作が入る



▲ 牛ほめ…嫁が酒を注ぐ



▲ 絵巻 (昭和11年) 牛ほめ

第3段 白 鍬

後方に並ぶ総代と白鍬 (黒紋付、羽織袴の5人) の全員に紙垂のついた柳の小枝を配る。この柳を持って「白鍬」を唄う。

へ年の初めにあか時をきて。ひやそら見ればよしや
 へそら見ればそらこそよけれ。おんくところよしや
 へ白金をひしゃくに曲げて。ひや水汲めばよしや
 へ水汲めば水もろともに。ひやくめばくまれずや。
 へ田を作らばかど田を作れ。かど田よしや殿原の
 へはいなびけ 御鍬の初に。日の本の国王大しの
 へ鎮守観音御福田の。院主の坊や にそうさく
 へうばたちや こひたち。庄やのとしや こやのとし
 へ田遊の わかとのばら。大旦那や小旦那の 以下略

第4段 田打ち・牛ほめ

堂の中央に大太鼓を置く。鍬を担いだ兄弟 (黒紋付、^{なっつけ}裁着、頬被りの兄弟2人) が出て大太鼓の左右に立つ。兄は鍬の柄に大根、人参、わかめをつけた弁当箱を掛け、弟は酒の入ったひさごを掛けている。

へ大とうよを、おお当年な稲ほにあやかさって、ながながしさよ。やたまや。
 へなんぞ、やたまや。
 へやたまのひるい (昼飯) わなんぞ、やたまや。
 へおれかひるいそうか。……略
 へおお、しろわへごしゆつし参って、しゆんのたああらめくさや。

ここで、鍬の柄に掛けた弁当箱やひさごを下ろしてテイダイと呼ばれる四角形の伸餅を掛ける。

へひいるたんえをおりて、なあごのいいりうら、いやふんもとようりんじや、
 こほれふんもとようりんじや。

と唄うと、鍬で田を打つ所作をする。次に、

へ年次第にひるい (昼飯)、よばらせたまへ、さないだに里の若殿原を、や
 まがのものは、心ひろいとおじゃる。

などと唄うと、昼飯持ち (振り袖、お高祖頭巾) と牛が登場する。牛は鳴きながら登場して太鼓の上に頭をのせる。昼飯持ちは堂内にいる人々全員に酒を注ぎ、自らも注いでもらって酒を飲み、尻まくりをして退場する。田打ちの二人が牛を放つ歌を唄うと牛は暴れ出し、見物客の間に飛び出す。ひと暴れして退く。



▲ のっとう



のっとう ▶

絵巻（昭和11年）
のっとう ▶



▲ 絵巻（昭和11年）鳥追い



鳥追い ▶

第5段 のっとう

これは祝詞のことで、苗代に種籾を蒔き、水口祭りの祭文をあげることがその内容である。袴に小刀をつけた若者2人が登場し、三方を捧げて舞台に出てくる。中央に据えられた太鼓の上に、ゴオウサンと白紙に包んだ米二包を載せた三方を置く。このゴオウサンは牛王宝印のことで、30センチメートルほどの長さのカシの木の先を四つ割りにし、その間に牛王宝印のお札を挟み、小さく切った伸餅を載せてある。これは前日に寺方で作られ加持されたものである。

まず、総代頭が三方の上の米を三方向に蒔く種下ろしの所作がある。実際に蒔くので、かつては参詣の人達は競って拾ったものだという。古くから苗代田の種子に混ぜて蒔くと鳥や虫の害を除き、豊作が意のままになるという信仰があった。牛王宝印によってその呪力を米に籠めるからである。

種蒔きがすむと立っている2人が、腰に手をあて（かつては袂に手を入れて）祭文を唄うが、このとき太鼓は入らない。田遊祭の中で、この「のっとう」の謡が一番難しいといわれている。

第6段 鳥追い

袴を着て小刀をつけた5人の鳥追い役が登場し、舞台中央の太鼓の周囲を取り囲む。のっとうと同様腰に手をあて（かつては袂に手を入れて）、両足を左右にやや開いて大きく運びながら調子を取り、鳥追い唄を唄って右回りに回る。先頭の者が音頭をとって「はあ、あれはたが鳥追い」と唄うと、5人全員で「〇〇の鳥追い」というように唱和する。ここでも太鼓の音は入らず、5人の足拍子だけでとても単調だが、厳かで直線的な動きとなっている。これは5人が揃って唄う次第で、相当の熟練を要する。

へはあ、あれはたが鳥をひ。日の本国王大神の鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。鎮守観音御福田の鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。院主の坊やにそうさくの鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。うばたちや、こいたちの鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。庄屋のとし、こやのとしの鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。田遊の若とのぼらの鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。大旦那や小旦那の鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。まんさんな参どや、きせんしやうや、せうとう
たんなの鳥をい。

へはあ、あれはたが鳥をひ。まんざんなや … 以下略



◀ そうとめ

▼ 絵巻 (昭和11年) そうとめ



▲ 絵巻 (昭和11年) 大弓放ち



▲ 餅 投 げ



▲ 大弓放ち



▲ 庭 詣

第7段 そうとめ

そうとめは「早乙女」のことで、最年少者10人が左右から登場する。花笠に襷掛けで袴をはき、扇子を開いて両手で持ち、中腰で前かがみになり、唄の拍子に合わせて上体を左右にゆらす。この早乙女の前にかっこう役1人が、踊り出る。花模様の長襦袢を着て尻端折りをし、襷掛けに頬被り、背には羯鼓をつけ、両手に撥を持って立て膝をつく。唄が「神となえ」と呼ばれる遠江一円の神仏の名前を歌い始めると、かっこうが立って踊り出し、早乙女は舞をやめて立て膝になる。かっこうは両手の撥で背中の羯鼓を打つふりをしながら、唄の調子に合わせて左右交互に片手片足で跳びはねて踊る。このそうとめでは、太鼓も賑やかに、唄も人数が多く、踊りも大きく大勢なので、田遊中最も華やかな場面である。唄が途中まで進むと早乙女も立って踊り出し、かっこうは早乙女の花笠を撥で打ち、早乙女も羯鼓を扇子で打ち返すといった乱舞をくりひろげる。最後には笠も扇子も羯鼓もめっちゃめっちゃにつぶしてしまう。なお、「かっこう」役は、羯鼓を背負うところからつけられた名称であろう。

へ我も我もなびけ、おおれおもうべしやなん。

へよき日よき日をばな、さをりてすうすうめものかなん。

へあさはあさははやかいな、おおりてすすめんもうのうかなん。

へげによをすんまあにこそ、ようのむらさいさいたりやなん。

へいやさて、ことしはやな、我が取るなえのまわすやなん。

へななへの風も なをやはらかにふけばなん。

へいやさて、ことしはやな、よい酒のわくべしやなん。

へいやさて、ことしはやな、よい酒のわくべしやなん 以下略

大弓放ち

田遊祭の七段の舞が終わると、白山神社において投矢の神事がある。一同は白山神社の石段を大弓を持って上る。そして拝殿前から、一の矢と二の矢をそれぞれ、早乙女の東西の頭が「徳川徳兵衛、この一の矢(二の矢)の矢先にてつかまつる」と大音声に叫んで投げる。一の矢、二の矢に続いて早乙女役の若連が広場の群衆に向かって大矢を投げる。この投矢は害虫、害鳥をはらい豊作を願うためのもので、厄除けになるともいう。このほか小さい60対の破魔矢も投げる。現在では、危険防止のために投矢の後大師堂前と本堂前で餅投げを行い、その中の大きな紅の餅を拾った人に大矢を、小さな紅餅を拾った人には破魔矢を渡すようにしている。

村方の伝承方法

田遊祭は、法多山麓の村方といわれる法多地区の人々によって舞が奉納されている。昔は数え歳15歳から30歳までの若い衆が中心であったが、平成5年1月現在では15歳から45歳までの、かつて若中老（若連と中老）と呼ばれた組織がおもになっている。また、昭和49年に「法多山田遊祭（七段の舞）」を法多山尊



法多公会堂における練習風景

永寺本尊に五穀豊饒の祈願と民俗芸能の品位と情緒を永久に保存、継承する」目的で、「法多山田遊祭保存会」が発足した。会員は、法多地区に居住する20歳以上の男子で、30代、40代、50代から世代別に役員を選出して、会長1名、副会長2名、理事9名を決め、その他に2名の師匠と2名の監事を置いている。なお、これは毎年9月の総会で決められる。祭典行事に参画する人選は、11月の総会において決定する。

さて田遊祭では、七段の舞の役割がそれぞれ年齢順に以下のように決まっている。①そうとめ 10人、②そうとめの東の頭と西の頭 2人（牛ほめの牛役も兼ねる）、③そうとめのかっこう 1人、④田打ちの女房 1人、⑤田打ち 2人、⑥鳥追い 5人、⑦のっとう 2人、⑧棒の舞 1人、⑨太刀の舞 1人。ここまでをいわゆる25歳までの若連が行い、中老になると白鍬となり、まず太鼓（1人）役になる。七段の舞のうちの白鍬は、大師堂の正面に座っている白鍬役5人と檀家総代5人のうちの3人と先従士2人が行く。なお、田遊祭を変わらず伝承していくために2人の師匠がいる。

保存会ができる以前は毎年12月に入ると筆頭（大老役）から大祭の配役が発表された。練習と準備は、現在では法多公会堂で行っているが、かつては檀家総代の家を順番に会所としていたといい、祭当日も村方の行列は総代の家から出発した。むかしは祭の一週間前に、身を清めて清浄を保ち舞の稽古をしたというが、現在では前年のうちに3日間の稽古を師匠の指導のもとに行っている。昭和24、5年頃までは六日堂のあと稽古上げをした。なお、稽古上げや祭当日の食事のしたくはすべて若い衆の仕事であった。



